

何を求めているのか

大学宗教センター長 栗原 健

³⁵ その翌日、また、ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。³⁶ そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。³⁷ 二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。³⁸ イエスは振り返り、彼らに従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ——『先生』という意味——どこに泊まっておられるのですか」と言うと、³⁹ イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。⁴⁰ ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。⁴¹ 彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア——『油を注がれた者』という意味——に出会った」と言った。⁴² そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ——『岩』という意味——と呼ぶことにする」と言われた。ヨハネによる福音書 1 章 35 節-42 節

レクチオ・ディヴィナという言葉をご存知でしょうか。これは中世以来ヨーロッパの修道院で行われていた聖書の読み方で、聖書の言葉を頭で理解するだけでなく、味わいながら心で読むというものです。

具体的には、まず聖書箇所をざっと読みます。続けて、今度は時間をかけながら、1 つひとつの言葉に注意しながら読み返して行きます。そうすると、なぜか心に残る言葉、気になる言葉が 1 つか 2 つは出て来ます。

そこで今度は、「なぜ、この部分が心に残るのだろう。それは一体、自分の心について何を示しているのだろうか」と思いめぐらして行きます。無理に結論を出す必要はなく、言葉から思い出すものを追ってみることが大切です。文章の意味を知的に理解するだけでなく、自分の心を重ねてイメージを広げて行く。これがレクチオ・ディヴィナです。この読み方は、聖書を自分に向けて語られたメッセージとして親しんで行くために、確かに効果的なやり方だと言えます。今日は、このレクチオ・ディヴィナのようなやり方でみ言葉を味わい、そこから汲み取れることを見て行きましょう。

今日の箇所は、イエスの弟子となる 2 人の男性が初めてイエスに出会うシーンです。共観福音書では、彼らの出会いは違つかたちで描かれているので、これはヨハネ独自の伝承と言えます。一見すると、ここで交わされているイエスと 2 人のやり取りは、単なる日常会話のように見えます。しかし、福音書の文章は、紙に記される前に長い年月をかけて余計な言葉が削ぎ落とされ、本質的な、意味ある言葉だけが伝えられ

たものですから、そこには必ず深い意味がある筈です。

簡単にこの箇所を説明しますと、「ヨハネ」は洗礼者ヨハネのことを指します。悔い改めを呼びかける彼の言葉に動かされ、多くの人々が彼から洗礼を受けに集まっていた。イエスもこのヨハネから洗礼を受けています。この場面で、ヨハネは自分の 2 人の弟子に向かって、「あそこにいるイエスこそが、来たるべき大切なお方なのだ」と指し示します。そこで 2 人はヨハネを離れてイエスのほうに行き、彼の弟子となるのです。では、彼らの最初の会話とはどのようなものでしょうか。

「イエスは振り返り、彼らが従って来るのを見て、『何を求めているのか』と言われた。」(38 節)「何を求めているのか」は、まさにイエスの問いかけにふさわしい言葉です。これをじっくりと味わいましょう。

この言葉は、単に「何か用か」と尋ねたものではありません。「あなたは、私に何をしたいのか。」「あなたは、人生の中で何を求めているのか。」「何があなたの本望なのか。何があなたを満たすことができるか。」こうした問いが、この言葉を通じて語られて来ます。これこそが、全ての人に向けられているイエスの最初の問いかけでしょう。私たちがこのように礼拝に出席したり聖書に向かうのも、心に何か求めるものがあることですが、「それは何だと思うか」とイエスは問うのです。

自分は、本当は何を求めているのか。この問いは人生において本質的です。この疑問を 1 人ひとりの生徒・学生の中で成熟させ、深めて行くことこそが、教育の究極的な目的、教育の本懐というものではないでしょうか。このことを忘れないようにしたいです。

それでは、この言葉に対して 2 人の弟子たちは何と答えたでしょうか。彼らは、「ラビ、どこに泊まっておられるのですか」(38 節)とだけ言います。これもまた深く味わうべき言葉です。つまり、彼らはイエスの質問には答えず、「立ち話ではなく、腰を据えて話をしたいのです」と言っているのです。

このような姿勢を、現代の社会は大幅に失くしてしまっているのではないのでしょうか。知りたいことだけを聞き、必要な答えだけを切り取る。答えはすぐに見つかって当たり前。そのような性急な姿勢が、今の社会では蔓延しています。学生も、ネットを見れば答えが見つかると思っていることがしばしばです。答えが無い問いについて考えることは、非常に苦手です。待てない。すぐに結論を出して安心したい。けれどもその結果、消費する情報としての答えばかりが増えて行き、自分のほうがメディアに消費されてしまうことにもなりやすいです。

人間は、たとえそれが正しいものであったとしても、答えだけポンともらっても何も変わらないことが多いです。答えを探し続けるプロセス、答えが見つかる時を待つという道のりこそが、最も自分自身を変えて行く時です。このことを若者たちに伝えることも、学校の大切な役目でしょう。期せずしてこの 2 人の弟子は、最も正しい反応をイエスに対してしたのです。

それでは、彼らの答えにイエスは何と答えたでしょうか。「イエスは、『来なさい。そうす

れば分かる』と言われた」(39 節)とあります。「来なさい。そうすれば分かる。」この言葉は、実に大きな恵みにあふれたひと言です。

普通に考えると、これは「どこに滞在しているか、来れば分かるだろう」という意味に見えますが、それだけであれば、わざわざここに書く必要は無い筈です。そうではなく、「私と一緒に歩いて行こう。そうする中で、あなたが何を求めているかがハッキリ見えて来るだろう」という招きの言葉と見るべきです。

この招きは、聖書と向き合う上で最も重要なものだと言えます。私たちはとかく、「頭で全てを理解してから、イエスのもとに行こう」と思いがちですが、これは無理です。イエスと共に歩いて行く中で、少しずつ神のこと、自分のこと、他者のことを理解して行くことになります。自分が本当は何を望んでいるのか。何が自分の心の奥にあるか。これらのことも、イエスと人生を旅する中で少しずつ明らかになって来るのです。

実際、福音書は、弟子たちが長らくイエスのことも、自分たち自身のことも全く誤解していたことを伝えています。イエスと共にローマ帝国の植民地支配を打ち破り、新しい国の指導者になる。そうしたことを弟子たちは自分たちの一番の望み、神の思いだと考えていたふしがあります。

けれども、それは神が求めていたことではなかった。自分たちが本当に望んでいたことでもなかった。そのことを、彼らはイエスの十字架という苦しみ、復活という喜びを体験して行く中で見出して行ったのでした。まさに「来なさい。そうすれば分かる」です。

同じ招きが、私たちにも向けられています。それは同時に、「あなたは変わることができる。本当に望んでいることを、見つけることができる」という、励ましと約束の言葉であるとも言えるでしょう。このイエスの招きにどのように答えるかが、私たちの人生の課題です。

この後に続く言葉も、なかなか味わい深いものではないでしょうか。「そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。」(39 節) 16 時というとまだ日が高いように思えますが、電気が無い古代の世界ではそろそろ夕方です。実際、古代ユダヤでは 18 時からが夜とされていました。

夕日に照らされた野原の道を 3 人が静かに歩いて行き、やがて腰を下ろして休んでいる。その姿を想像すると、不思議な静けさと美しさがあります。イエスの招きを受け入れる、共に歩むということは、本当はこういうものなのだ…ということが、心に迫って来るようです。せわしない日常に追われるあまり、私たちは、このように共に歩み、共に座るということを忘れていないのでしょうか。

以上見て来たように、一言ひとことを味わいながら読むことによって、今日の箇所が、私たちに向けられた本質的な問いかけとなっていることが見えて来ます。「何を求めているのか」「どこに泊まっておられるのですか」「来なさい。そうすれば分かる」。この 3 つは、私たち自身の人生の歩み、この学院の歩みの土台をなしている言葉でもあります。これらの言葉を心の中であたためながら、「そうすれば分かる。あなたは変わることができる」とのイエスの約束を受け止め、これからも共に歩いて行きましょう。

(2023 年 6 月 21 日)